

那珂遺跡 20

- 那珂遺跡群第58次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告第563集

1 9 9 8

福岡市教育委員会

序

福岡市は、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。いまさら申し上げるまでもなく、本市はその地理的関係から、大陸との門戸として原始から栄え、多くの遺跡が眠っています。博多駅の南に位置する比恵、那珂台地は埋蔵文化財の宝庫ですが、都心部に近いために開発が盛んに行われています。

このため、本市では、各種の開発などでやむなく消滅する遺跡につきましては工事に先だって発掘調査を行い、記録保存を図っております。

今回報告いたしますのも、ビル建設工事に先だって実施したもので、古代から中世の複合遺跡である那珂遺跡を平成8年に実施しました発掘調査記録です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた土地所有者の吉村文好氏をはじめ、御指導と御援助をいただいた関係各位にたいし、深く感謝いたします。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 町田英俊

本文目次

| | | |
|-----|------------------|----|
| I | はじめに..... | 1 |
| | 1. 調査に至る経過..... | 1 |
| | 2. 調査の組織..... | 1 |
| II | 遺跡の環境と概要..... | 2 |
| | 1. 遺跡の位置と立地..... | 2 |
| | 2. 遺跡の歴史的環境..... | 2 |
| III | 調査の記録..... | 6 |
| | 1. 調査の概要..... | 6 |
| | 2. 遺構..... | 8 |
| | 3. 遺物..... | 12 |
| IV | 小結..... | 18 |

Figures

| | |
|---------------------------------------|----|
| Fig. 1 調査位置図(1/200,000)..... | 図 |
| Fig. 2 調査点及び既測定点位置図(1/8,000)..... | 2 |
| Fig. 3 周辺道路分布図(1/30,000)..... | 3 |
| Fig. 4 調査地位置図(1/1,000)..... | 6 |
| Fig. 5 遺構配置図(1/150)..... | 7 |
| Fig. 6 S E41遺構実測図(1/20)..... | 9 |
| Fig. 7 S E42遺構実測図(1/30)..... | 9 |
| Fig. 8 S K40遺構実測図(1/50)..... | 9 |
| Fig. 9 S K01出土遺物実測図(1/3)..... | 13 |
| Fig. 10 S K40出土遺物実測図(1/4)..... | 13 |
| Fig. 11 S K42出土遺物実測図(1/4)..... | 13 |
| Fig. 12 S K43出土遺物実測図(1/4)..... | 13 |
| Fig. 13 黒色+包含層出土遺物実測図1(1/4)..... | 14 |
| Fig. 14 黒色+包含層出土遺物実測図2(1/3,1/4*)..... | 15 |

PLATES

| | |
|-------------------------------|----|
| PL. 1 調査地周辺航空写真(1948年撮影)..... | 4 |
| PL. 2 調査地周辺航空写真(1995年撮影)..... | 5 |
| PL. 3 調査区南半部遺構検出状況(南から)..... | 10 |
| PL. 4 調査区南半部遺構検出状況(東から)..... | 10 |
| PL. 5 調査区北半部遺構検出状況(南から)..... | 11 |
| PL. 6 S B01-02(東から)..... | 11 |
| PL. 7 S E41(南から)..... | 11 |
| PL. 8 S K40(南から)..... | 11 |
| PL. 9 S K42(南から)..... | 11 |
| PL. 10 第58次調査出土遺物1..... | 16 |
| PL. 11 第58次調査出土遺物2..... | 17 |

凡例

1. 本書は、福岡市教育委員会が博多区那珂1丁目486-487地内
の集合住宅建設工事に先立って、1996年(平成8年)に実施した
那珂遺跡群第58次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書における各調査の細目は下記のとおりである。
3. 遺構図には、遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前に、
SE(井戸)、SK(土坑)、SX(その他)などの分類記号を付した。
4. 本巻に掲載した遺構、遺物の図面作成は中村智子・瀬木が行
ない、製図は山口とし子・中村・瀬木が行なった。
5. 本書に掲載した写真は、瀬木正志の撮影による。
6. 本書の執筆・編集は瀬木正志が担当した。
7. 発掘調査の遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財セン
ターに収蔵されている。

| 遺跡名 | 那珂遺跡 | 遺跡略号 | N A K - 5 8 |
|------|----------------------|------|----------------------|
| 調査地 | 福岡市博多区那珂1丁目486 | 調査番号 | 9 6 1 9 |
| 調査期間 | 平成8年(1996)7月4日~8月26日 | 調査面積 | 4 8 0 m ² |



Fig. 1 遺跡位置図 (1/200,000)

I はじめに

1. 発掘調査に至る経過

1995年(平成7年)12月7日付で、福岡市博多区那珂1丁目486他1筆における開発行為にともなう埋蔵文化財事前審査願いが土地所有者の吉村文好氏から埋蔵文化財課へ提出された。書類審査の結果、当該地は、弥生時代から古代中堀の南岸および堀の内部が想定されることから、現地において試掘調査が必要であるとの結論に達した。このため、1995年(平成7年)12月18・19日に当該地においてバッカフローを用いた試掘調査を実施した結果、地表下0.7m~1.1mにおいて土坑や弥生時代中期を中心とする遺物包含層の存在を確認した。

福岡市教育委員会は、試掘調査の結果をもとに土地所有者の吉村文好氏と遺跡の保存についての協議を行い、記録保存を前提とする発掘調査を実施することになった。発掘調査の実施にあたっては土地所有者の吉村文好氏と福岡市(市長 桑原敬一)との間で発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を教育委員会埋蔵文化財課が行い、調査費用を吉村氏が負担することとした。

発掘調査は、1996年7月4日~8月26日、遺物の整理・報告書の刊行は1997年6月~翌年3月に行った。

2. 発掘調査の組織

平成8年度(発掘調査)

| | | |
|-----------|--|------|
| 調査委託 | 博多区那珂二丁目3-24 | 吉村文好 |
| 調査主体 | 福岡市教育委員会 教育長 | 町田英俊 |
| | 文化財部長 | 後藤直 |
| | 埋蔵文化財課長 | 荒巻輝勝 |
| | 同課第2係長 | 山口謙治 |
| 試掘調査・事前協議 | 主任文化財主事 | 山崎龍雄 |
| | 文化財主事 | 池田祐司 |
| 事前協議 | 主任文化財主事 | 松村道博 |
| 事務担当 | | 西田結香 |
| 調査担当 | 文化財主事 | 瀧本正志 |
| 調査協力 | 池田福美 石屋四一 岩瀬玄子 櫻田信一 甲斐康完 亀井嵩 川井田明 川井田ムツ子 河野一一 高着一夫 酒井次憲 简井敦子 犬丸秀仁 中川祥一 中村智子 西川謙 別府俊美 松尾文江 松永正義 山口とし子 吉田博昭 渡辺淑子 | |

平成9年度(資料整理・報告書作成)

| | | |
|------|--------------|------|
| 整理委託 | 博多区那珂二丁目3-24 | 吉村文好 |
| 整理主体 | 福岡市教育委員会 教育長 | 町田英俊 |
| | 文化財部長 | 平塚克則 |
| | 埋蔵文化財課長 | 荒巻輝勝 |
| | 同課第2係長 | 山口謙治 |
| 事前協議 | 主任文化財主事 | 松村道博 |
| | 文化財主事 | 尾山洋 |
| 事務担当 | | 浅原千晶 |
| | | 河野淳美 |
| 整理担当 | 文化財主事 | 瀧本正志 |
| 整理補助 | 中村智子 山口とし子 | |

II 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

本調査地周辺の地形は、北東側を三郡山地から延びる丘陵性山地の月隈丘陵に、南西側を背振山地から延びる丘陵に挟まれ、北西から南東方向にはば直線的に延びる溝状地形が発達し、福岡～二日市～筑後地方へ通じる唯一の解析平地となっている。この低平地は、北流する御笠川・那珂川の沖積作用によって形成された標高10～15m程の平野となり、福岡平野の東南部の一画をなす。また、この低平地を縦に分断するように、御笠川と那珂川との間には春日丘陵が島状に連続しながら存在する。

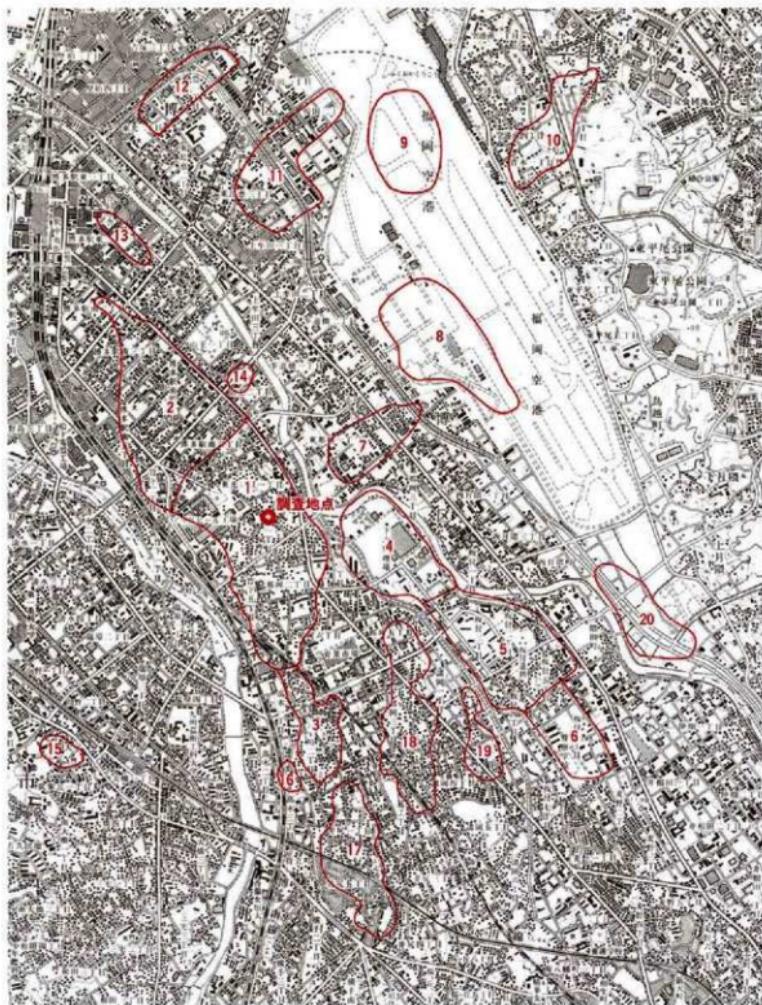
那河遺跡は、この春日丘陵が博多湾方向に伸びるに従って低丘陵化した幅500mほどの台地上に位置する。

2. 遺跡の歴史的環境

これまでに那河遺跡では60次を超える発掘調査が実施されており、丘陵上においては原始からの人々の暮らしの痕跡が連続して存在していることが明らかとなっている。

縄文時代晩期までの遺構としては明確な検出は無いものの、土器、石器などが多く出土している。この台地上に定地性集落の存在が明らかになるのは縄文時代晩期後半期以降のことである。弥生時代の集落の発展状況は、台地の北半部を占める比恵遺跡と共に榮え、特に中期以降の姿は、その出土品などから地域の拠点であったことを物語る。古墳時代に入ても、那河八幡古墳、剣塚北古墳、東光寺剣塚古墳などが築造されると共に、大型建物群や横列が造営されている。古代にかけては、官衙の存在を示唆する遺物が出土している。特に7世紀前半期には、同時期の軒丸瓦、鷲尾瓦が出土していることなどから寺院が建立されていたと推定される。



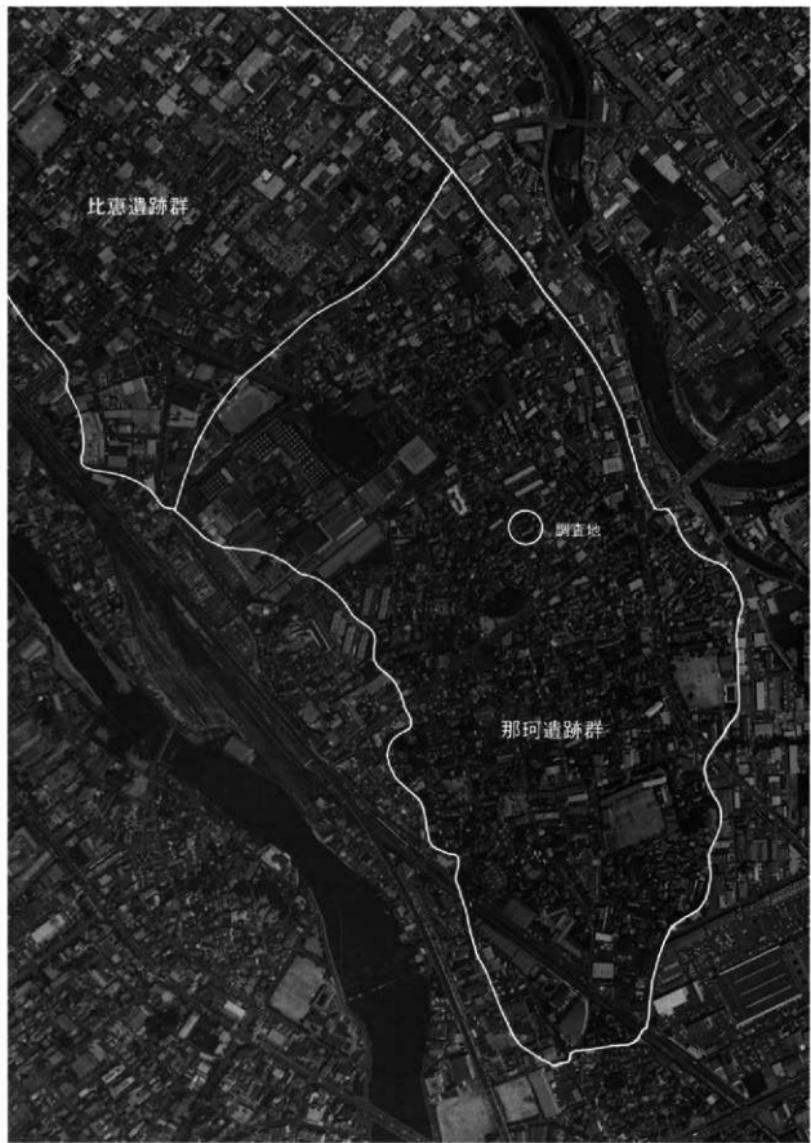


- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1. 那珂遺跡群 | 2. 比恵遺跡群 | 3. 五十川遺跡 | 4. 那珂君休遺跡群 |
| 5. 板付遺跡 | 6. 高畠遺跡 | 7. 京那珂遺跡 | 8. 省居遺跡 |
| 9. 上羊田遺跡 | 10. 席田青木遺跡 | 11. 横田遺跡 | 12. 豊造遺跡群 |
| 13. 駅東生産遺跡 | 14. 比恵発掘遺跡 | 15. 野間B遺跡 | 16. 井戸A遺跡群 |
| 17. 井尻B遺跡群 | 18. 諸岡A遺跡群 | 19. 諸岡B遺跡群 | 20. 立花寺B遺跡 |

Fig. 3 周辺遺跡分布図 (1/30,000)



PL. 1 調査地周辺航空写真 (1948年)



PL. 2 調査地周辺航空写真（1995年）

III 調査の記録

1. 調査の概要

那珂遺跡および比恵遺跡の立地する那珂丘陵は、台地状を呈するものの小さな谷が樹枝状に複雑に入り込む地形を呈している。本調査地も例外ではなく、遺跡の中央部に位置はするものの、近辺における発掘調査および試掘調査によって、調査地の東側および北側には谷が存在することが明らかであった。

調査区は、調査地の1,115.59m²の内480m²を対象とした。これは、試掘調査でえた調査地における遺構面の広がりおよび深さと建物建設工事により掘削が及ぶ範囲との検討からによる。

調査は、調査地における排土置場の関係から調査区を北半部と南半部とに二分割し、1996年7月4日に調査に着手し、終了したのは8月26日である。

調査地における土層の層序は、上層から造成土(マサ土)、旧耕作土(黒褐色土)、旧床土(茶灰色粘質土)、暗茶褐色粘質土、黒色粘質土、灰白色~白色粘土である。遺構検出は地山の灰白色~白色粘土層上面で行った。地山面は、調査区中央までは平坦もしくは緩やかに北側に傾斜するものの、北半部では東側と北側とに急激に下り、北端部では緩やかになる。さらに、北端部においてのみ地山面と黒色粘質土との間には層厚10~15cmを測る黒灰色粘性砂質土が存在していることから、調査区北端部は東西に伸びる小谷の底に位置することは明らかである。地山面直上にあり、遺物包含層の黒色粘質土は、調査区南半部の平坦部では認められず、中央部付近から現れて、谷底では60cmの堆積を測る。土層内からは、弥生時代~中世にかけての遺物が出土している。

出土遺物や記録類の整理は、平成9年4月~平成10年3月に行なった。

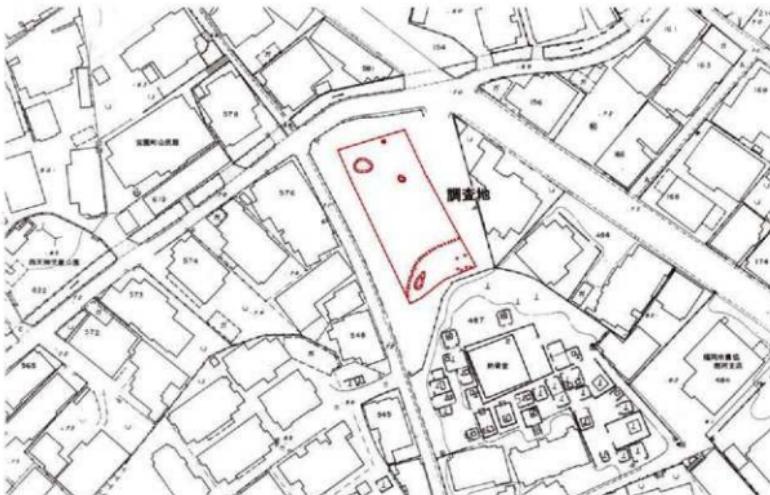


Fig. 4 調査地位位置図(1/1,000)

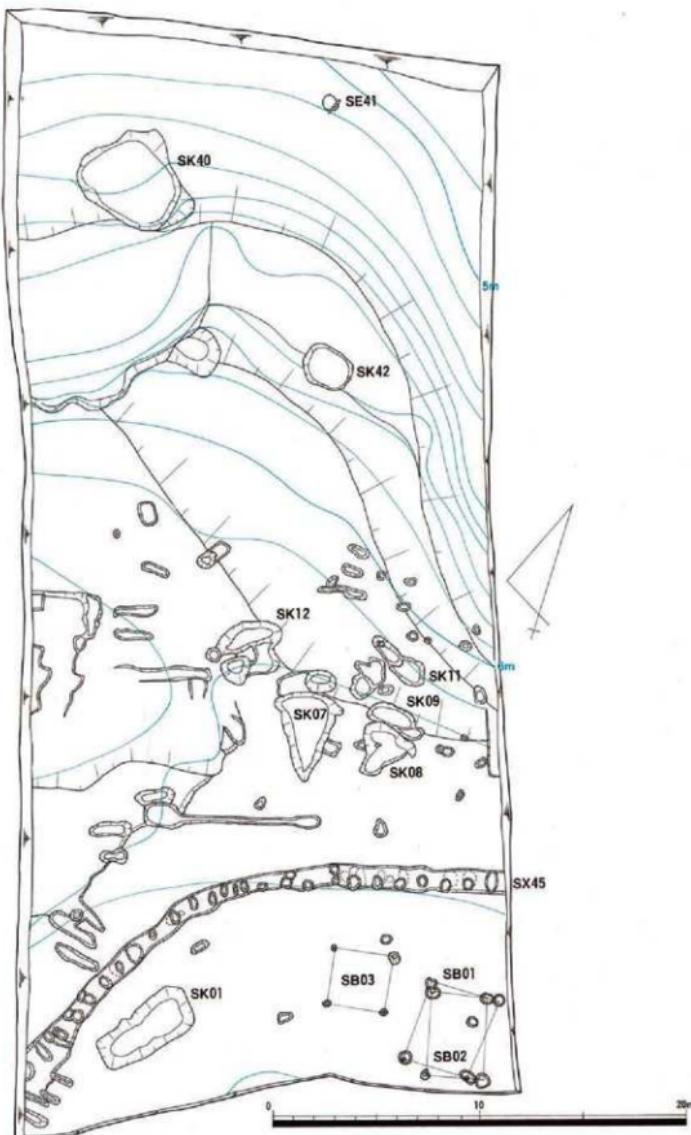


Fig. 5 遺構配置図 (1/150)

2. 遺構

今回の調査で検出した遺構は、建物3棟、井戸1基、土坑25基、柵列状遺構1列で、弥生時代中期、飛鳥時代を中心とする。大半の遺構は平坦面もしくは緩斜面を呈する調査区南半部で検出した。以下に主な遺構の説明を記す。

S B01 調査区南東隅で検出した4本柱の掘立柱建物で、南北方向に棟筋を持ち、柱間は2.1m×2.6mを測る。柱掘形は径0.35m～0.4mの円形で、0.2m～0.3mの深さを呈する。柱穴の切り合い関係から、S B02より新しい。調査地の削平が著しいことから、竪穴住居跡の可能性も考えられる。

S B02 調査区南東隅で検出した4本柱の掘立柱建物で、南北方向に棟筋を持ち、柱間は1.75m×2.6mを測る。柱掘形は径0.3m～0.4mの円形で、0.2m～0.3mの深さを呈する。竪穴住居の可能性も考えられる。S B01より古い。

S B03 調査区南東隅で検出した4本柱の掘立柱建物で、柱間は1.75m×1.8mを測る。柱掘形は径0.25m～0.3mの円形で、0.2mの深さを呈する。

S E41 調査区北辺で検出した素掘りの井戸である。掘形は径0.5mの円形を呈し、壁は直に立ち上がり、深さ1.0mを測る。掘形の上部では、径5cm、長さ50cmほどの丸太を1本だけ検出したが、井戸と直接的に関係するかは不明。埋土内からは、弥生中期の壺が出土している。

S K01 調査区南西隅に位置する土坑である。隅丸長方形の平面形を呈し、南北方向に長軸を持つ。長辺3.2m、短辺1.4m、深さ0.3mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。埋土内からは、瓦器範、土師器壺などが出土している。

S K07 調査区中央部、S K08の西側に位置し、平面形が二等辺三角形状を呈する土坑である。長辺2.7m、短辺2.0m、深さ0.2mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。埋土内からは、飛鳥時代の須恵器壺、坏、土師器壺などが出土している。

S K08 調査区中央部、S K07の東側に位置する。三角形状の平面形を呈する土坑で、辺1.7m、深さ0.2mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。

S K11 調査区東辺部中央、S K08の北に位置し、不整形な楕円形の平面形を呈する土坑である。長軸を斜面等高線と同じ東西方向に持つ。長径2.0m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。弥生時代中期の壺、高坏とともに須恵器が混在する。

S K12 調査区中央部、S K07の北東2mに位置し、平面形が不整形な十坑である。

S K18 調査区西辺部中央、S K07の西8mに位置し、不整形な平面形を呈する土坑である。長軸を斜面等高線と同じ東西方向に持つ。深さ0.2mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。弥生時代中期の高坏、壺の他に須恵器壺などが出土している。

S K40 調査区の北西隅で検出した十坑である。不整形な楕円形の平面形を呈し、長軸を斜面等高線と同じ東西方向に持つ。長径3.7m、短径2.9m、深さ0.3mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。弥生時代中期の壺、壺、器台、石斧などが出土している。

S K42 調査区の中央部、緩斜面から急斜面への変換点に位置する狭い平坦部で検出した土坑である。隅丸長方形の平面形を呈し、長軸を等高線と同じ東西方向に持つ。長辺1.5m、短辺1.2m、深さ0.2mを測る。底は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。弥生土器、石斧が出土。

S X45 調査区の南半部に位置する柵列で、延長16.5mを検出した。柵列は丘陵先端縁に沿うように弧を描くように造られている。柱穴は、幅0.7mほどの溝底に0.35mほどの間隔で掘られている。いずれも柱抜き取り穴を持つ。検出した柵列の弧から、直径25mの円形が復元される。

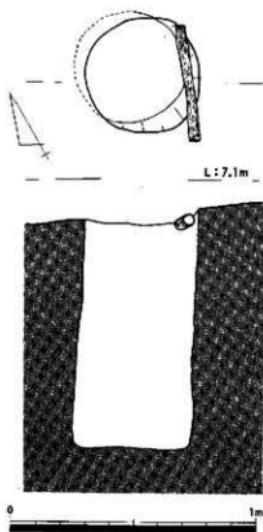


Fig. 6 SE41造構実測図(1/20)

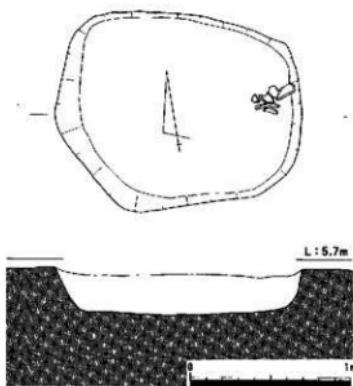


Fig. 7 SK42造構実測図(1/30)

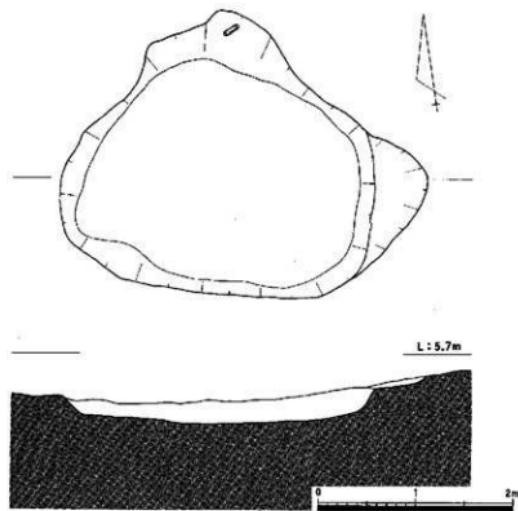


Fig. 8 SK40造構実測図(1/50)



PL. 3 調査区南半部遺構検出状況（南から）



PL. 4 調査区南半部遺構検出状況（東から）



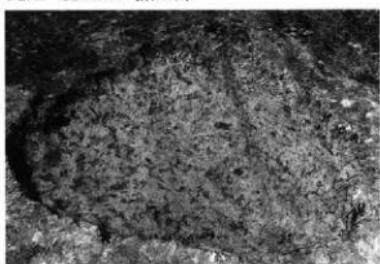
PL. 5 調査区北半部遺構検出状況（南から）



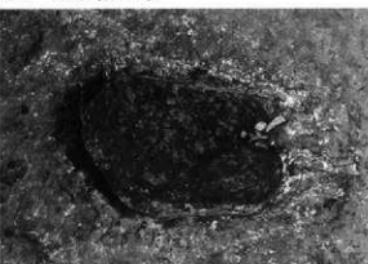
PL. 6 SB01・02（東から）



PL. 7 SE41（南から）



PL. 8 SK40（南から）



PL. 9 SK42（南から）

3. 遺物

遺物は、土坑などの遺構や遺物包含層の黒色粘質土層から、コンテナに45箱が出土しているが、大半の30箱が包含層の黒色粘質土層からである。遺物の時期は、弥生時代中期と飛鳥時代とに大別され、少量ではあるが奈良時代、中世の遺物も出土している。大半の出土遺物は弥生時代中期後半に比定される。遺物の内容は、弥生時代に属するものとしては石器（石斧・石包丁・砥石）、土器（高杯・壺・壺・器台・蓋・投弾）、飛鳥時代に属するものとしては須恵器（壺・蓋・壺）、奈良時代に属するものとしては須恵器（壺）、瓦（丸瓦）、中世に属するものとしては白磁（碗）、瓦質土器（碗）がある。

S K10 1・2 は瓦質土器の碗。1の底部は球形を呈し、高台は粘土紐の貼り付。高台は径7.8cmを測る。2の口縁部は直線的に外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。口縁径は16.5cmを測る。いずれも胎土は精選され、1mm以上の砂粒は含まれていない。

S K12 3 は片刃石斧の刃部。

S K40 4・5 は鍬先状口縁を呈する壺形土器で、5の口縁端部には刻み目が施されている。6・7は逆L字状の口縁を呈する壺形土器である。外面は刷毛目調整が施されている。8は器台で脚部を欠く。口径は10.2cmを測る。外面および口縁部内面には刷毛目調整が施されている。9・10は口縁がくの字に外反する無頸壺である。9の口径は13.5cmを測る。10は口径13cm、胴部径14.2cm、器高11.5cmを測る。胎上は粗く、1~2mm程の長石・石英砂粒を多く含む。外面には刷毛目調整の後に、丁寧に範磨きを施している。

S K42 11 は鍬先状口縁を呈する壺形土器である。胎土は黄灰色を呈し、僅かに1~2mm程の長石・石英砂粒を含む。口径は27cmを測る。12は石斧で、安山岩製の岩を素材とするが、刃部を失する。

S K43 13 は口縁がくの字状に外反する壺である。口径は18cmが復元される。胎土は茶灰色を呈し、1~2mm程の長石・石英砂粒を多く含む。

包含層 **14・15** は丹塗り磨研が施された蓋で、口縁端部近くに径2~3mmの孔2個を一組として2か所に穿けられている。16・17・19は丹塗り磨研の無頸部壺で、口縁部には径3mmの孔が2個を一組として2か所に穿けられている。口径は、16は13.2cm、17は11.9cm、19は11cmを測る。18は逆L字状口縁の壺で、口縁部には径5mmの孔が穿けられている。20は逆L字状口縁の壺で、口縁下に断面形が三角形の突帯一条をめぐらす。口径は16.2cm。21・22は鍬先状口縁を呈する壺形土器である。23・24・25はL字縁が逆L字状を呈する壺形土器で丹塗りが施されている。25の口縁端部には刻目が施されている。26はL字縁がくの字に外反する壺で、丹塗りが施されている。27は丹塗りの広口壺である。頸部には暗文が施されている。28・29・30は口縁が逆L字状を呈する壺である。いずれも口縁下には、断面形が三角形の突帯一条をめぐらす。31・32・33は底部に穿孔が施された壺である。いずれも焼成後に径1~1.5cmの孔が底部中央に穿けられている。34・35は鍬先状口縁を呈する高杯で、丹塗り磨研が施されている。36・37は高杯の脚部で、杯部を欠く。36には範磨きが施されているが、37の外面には刷毛目調整だけである。38・39は蓋。40・41は器台。42・43・44は鉢型土器である。42の口縁は直線的に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。43・44の口縁も直線的に外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。口縁下には断面形が三角形の突帯一条をめぐらす。45・46・47は口縁がくの字状に外反する壺である。胎土には、1~3mmの長石や石英砂粒を多量に含む。48は羽口。49~52は須恵器で、49・50は蓋と壺、51・52は壺、53は甕である。49・50とも外面に範記号が施されている。61は扁平石斧。62は石包丁。63・64・65・66は花崗岩などの丸石である。67は土製の投弾。包含層から出土した丸瓦の凹面には竹状模骨痕が認められる。



Fig. 9 SK01出土遺物実測図(1/3)

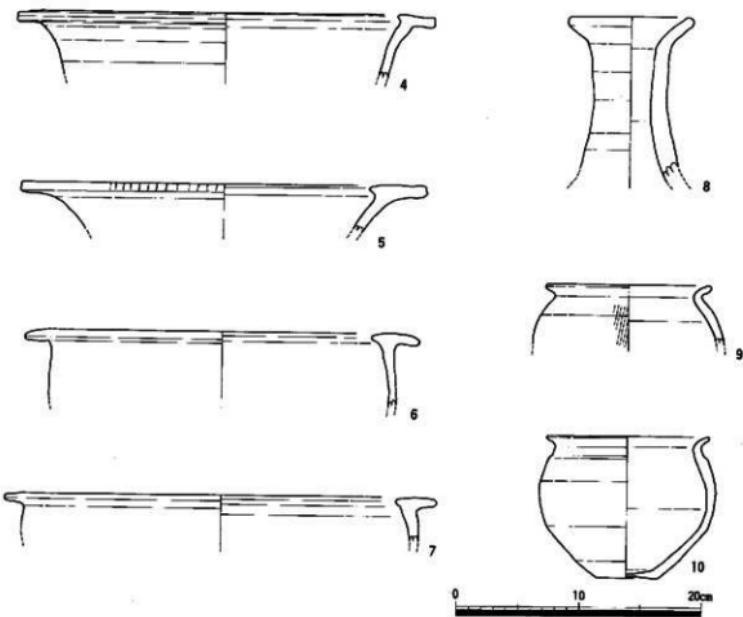


Fig. 10 SK40出土遺物実測図(1/4)



Fig. 11 SK42出土遺物実測図(1/4)

Fig. 12 SK43出土遺物実測図(1/4)

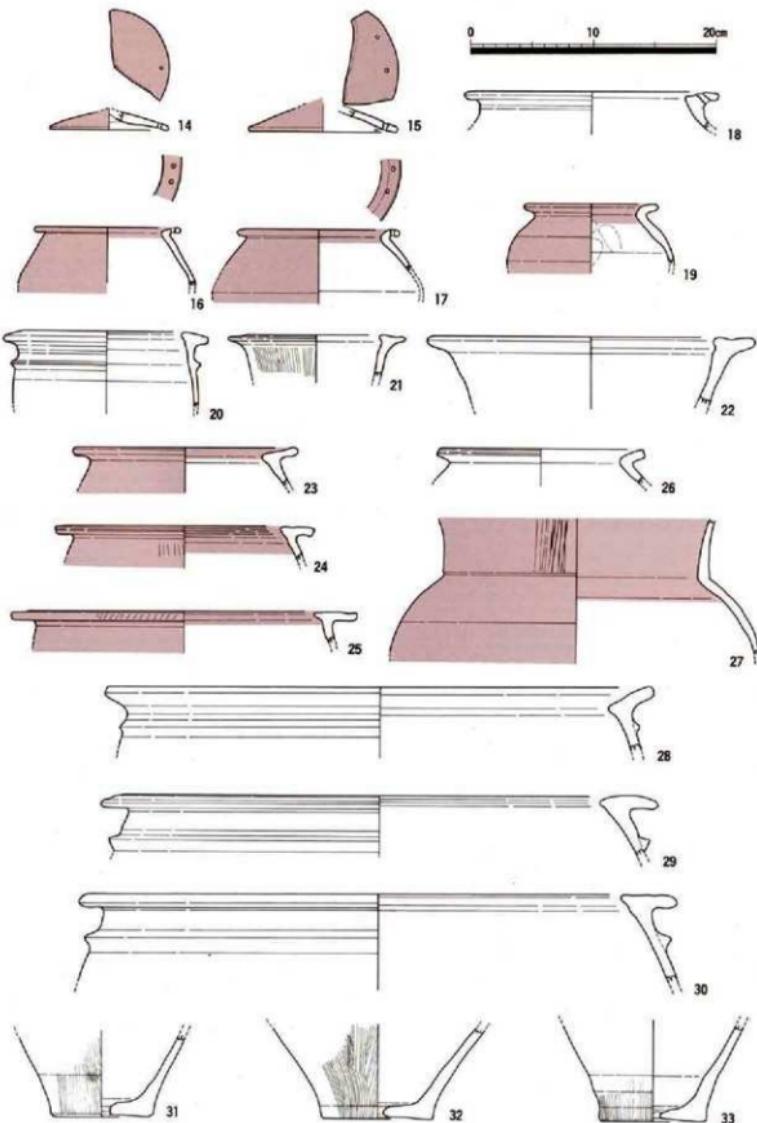
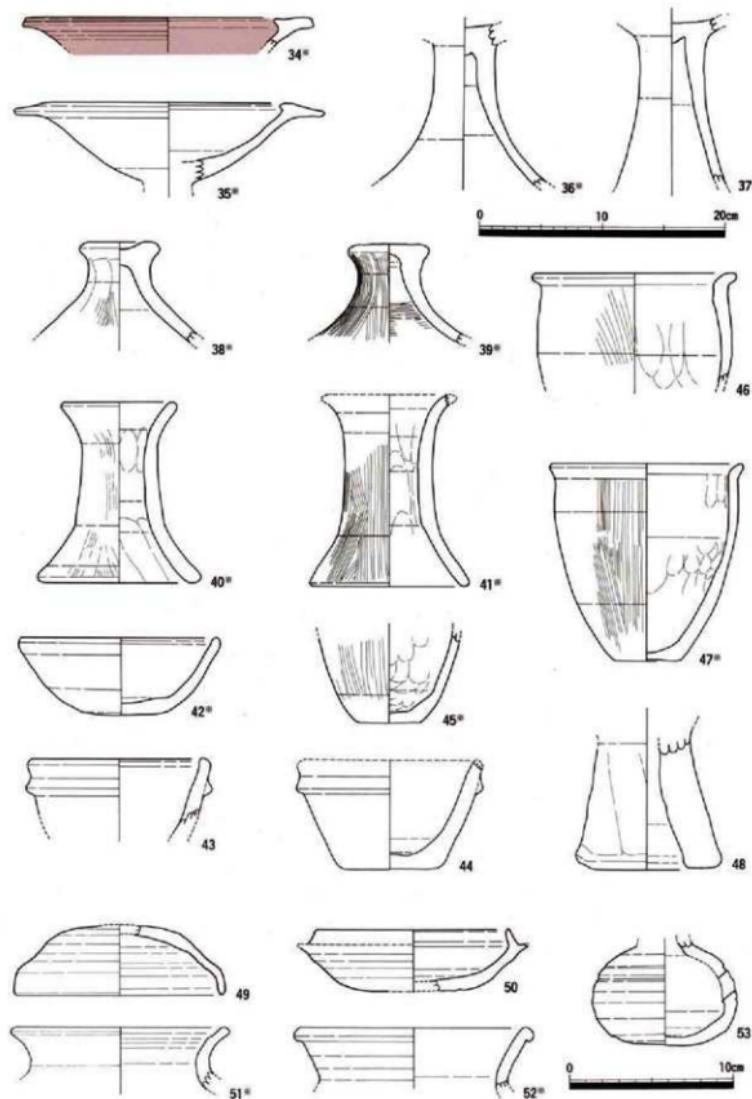
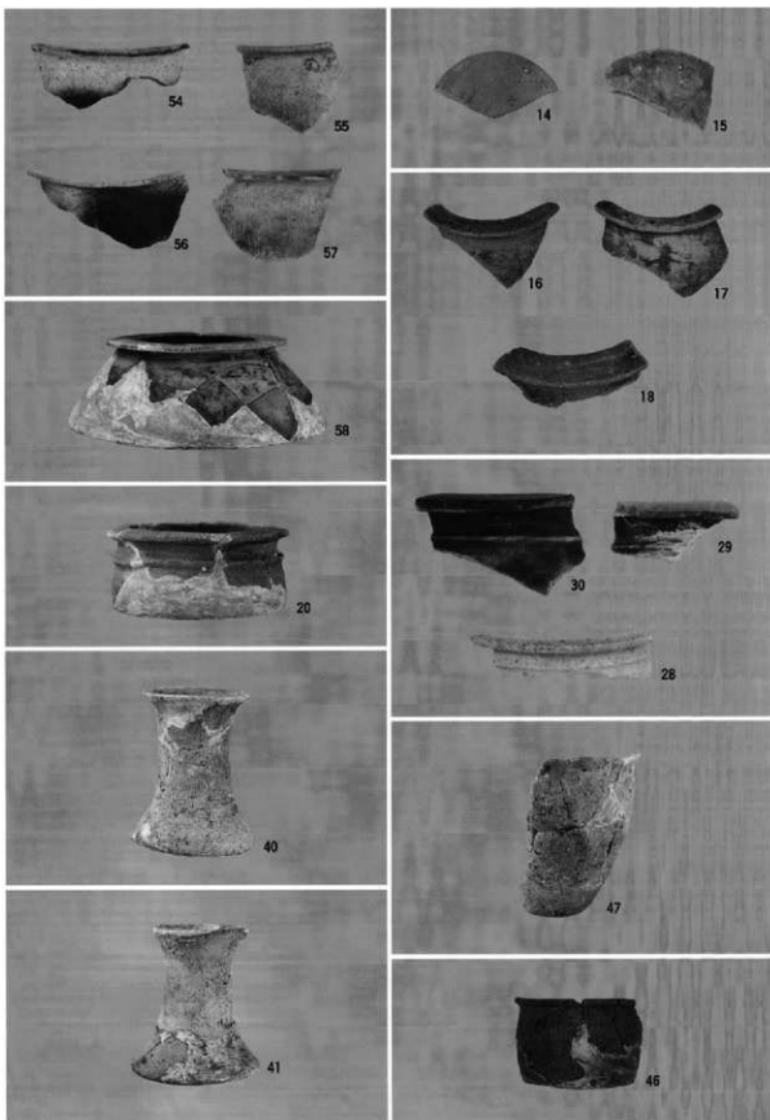
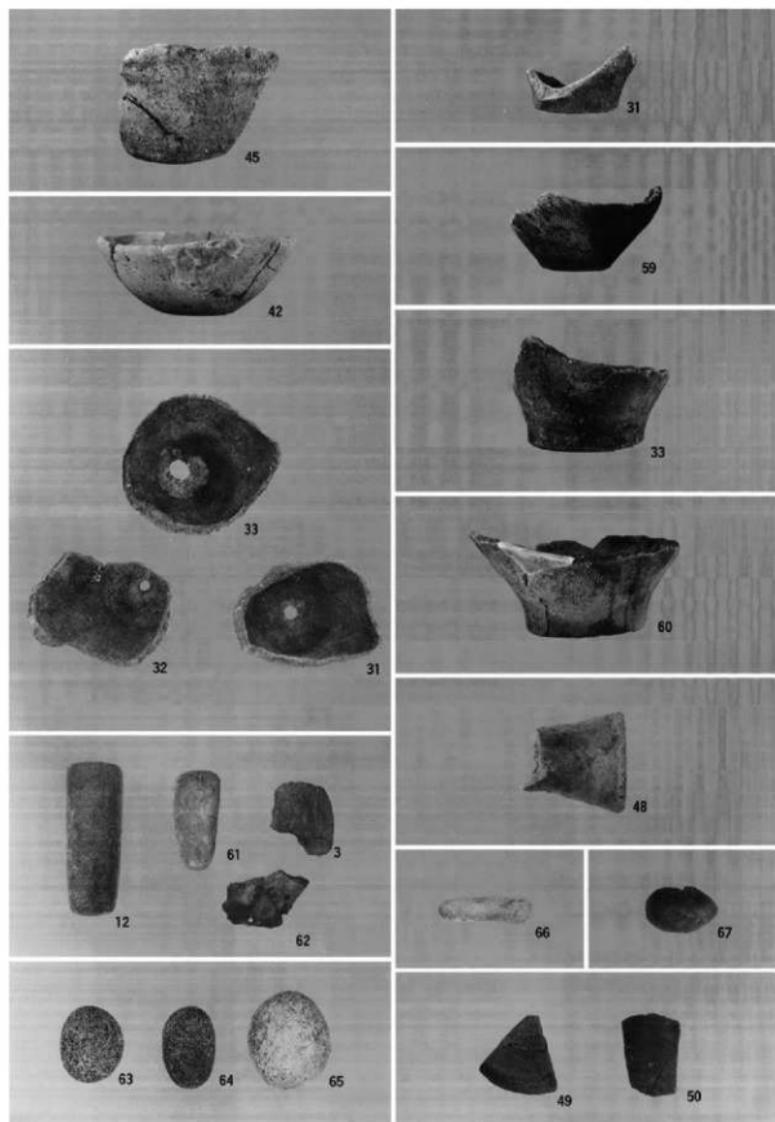


Fig.13 黒色土包含層出土遺物実測図 1 (1/4)

Fig.14 黒色土包含層出土遺物実測図 2 (1/3, 1/4^o)



PL. 10 第58次調查出土遺物 1



PL. 11 第58次調査出土遺物 2

IV 小 結

調査地の位置する那珂台地においては、現在までに60次を超える調査が実施してきた。その結果、縄文時代晚期～中世にいたる遺構が存在することが明らかとなり、特に弥生時代～古代にかけては福岡平野における政治・経済的基盤地であった可能性が高まりつつある。

今回の調査では、遺跡の立地する台地の凹地形の復元を進める資料を得るとともに、調査地の位置する丘陵における弥生時代から中世の姿を確認することができた。しかしながら、極めて狭い範囲の調査であったために、その全容解明は今後に託す必要がある。このために、本章では調査成果と課題とを述べ、今後の調査資料としたい。

1. 遺構の時期について

今回検出した遺構は、掘立柱建物・土坑・井戸・柵列などであるが、その大半は飛鳥時代以降に築造されている。弥生時代中期の遺構として明らかなのは井戸と僅かな土坑だけである。掘立柱建物もしくは堅穴住居と考えられる遺構については、弥生時代の可能性は高いものの、時期を断定するには至らない。その他の遺構は、埋土に弥生時代中期の遺物とともに須恵器が混在していることから6世紀末より古くなることはありえない。柵列についても、その時期を決定しうる資料を得ていない。

2. 出土遺物からの環境復元

出土遺物は、弥生時代中期後半に比定されるものが中心をなし、器種的には丹塗り磨研が施された壺・高杯なども含め、甕・壺・器台・蓋などが出土している。したがって、調査地が南から伸びる丘陵の先端部および谷部に位置することから、調査地の南側に位置する丘陵頂部に集落が存在したことは明らかであろう。さらに、6世紀末～7世紀初にかけても、墓もしくは集落などが存在する可能性が高い。しかしながら、調査地においても後世の激しい削平が認められることから、遺構の残存状況は厳しいことが考えられる。

那珂遺跡 20

福岡市埋蔵文化財調査報告書
〈第563集〉

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
☎ 092(711)4667
平成10年3月31日

印刷 博巧印刷株式会社
福岡市南区那珂ノ川1丁目9-7

THE NAKA SITES

20

Results of the 58th excavations
of the Naka sites
in Fukuoka, Japan

Mar. 1998

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY